

授乳における母親の意識・行動について — タイ農村部での調査から —  
 愛媛大教育 ○金子省子 慈恵青戸看護 石井八重子

目的 母乳の分泌は女性の生物学的特性であるが、授乳行為は、1つの文化的事象として変容する側面をもつ。授乳には、どのような要因が関わるのか。ここでは、タイ国チェンマイの農村部における調査をもとに、母親の意識・行動を中心として考察をすすめる。

方法 1987年、Sankam Peng(A), San Sai(B)の2地区、計100名の母親を対象とし、家庭訪問・質問紙調査を実施した。(慈恵医大・チェンマイ大学医学部家庭医学教室により、母子保健に関する調査研究が進められている。) 主な質問項目は、授乳法、授乳期間、補助食品、授乳についての情報源、母乳及び粉ミルクについての認識に関するものである。両地区の地域保健の現況、対象世帯の家族構成・家計の状況、母親の学歴等の事項についての調査結果を合わせ、分析する。

結果 2地区の比較を中心として述べる。両地区とも母乳哺育が最も多いが、都市部に近いBで、混合栄養の割合がより高い。授乳についての情報源(複数回答)では、Bで母親が、Aで看護婦が最も高い割合で選択されている。母乳の自然性と母乳哺育における学習の必要性、粉ミルクの使用についての認識は、地区毎に明らかな相違がある。Bでは、人工栄養との比較において母乳は「自然」と捉えられやすい。一方、Aでは、学習の必要性がより強調された回答と行っている。これら2地区にみられる授乳法と母乳認識の相違には、保健指導と現金収入の有無が関わっていると考えられる。